

Drama について 第9章 ドイツの Drama

(1)(2)(3)(4)(1966-4-19/4-26/5-17/5-24) Hans Sachs

(1)1966-4-19

Drama という言葉はギリシャ語の dran すなわち handeln から来ていて、狭義では脚本、戯曲、広義では演劇を意味している。そしてあらゆる種類の劇的なものを表している。従ってドラマを論ずる場合には勢い演劇(Schauspiel)を観察することにもなる。

ヨーロッパのドラマ、即ち芝居の発達には宗教劇の発達に基づいている。宗教劇はギリシャにおけるごとく、神への奉仕の儀式に源を発している。10世紀頃にキリスト教会で民衆に祈祷文を理解させるために交互に歌を歌い、あるいは僧侶が扮装して聖書の中の出来事、特にキリストの復活を述べたことからヨーロッパの宗教劇は始まった。ことに復活祭に僧侶がラテン語の問答の歌を交互に歌った。そのころ St.Gallen の Balbuls(840-912)や Joutillo などが主として活動して 950 年頃に書いた手稿が残っている。こういうことが後に復活したキリストとマリアの対話の形で1幕の劇に作られた。これが宗教劇の始まりであって、人物の用いる言葉はラテン語であった。13世紀にこうした劇がドイツにおいて大いに発展した。教会は狭いので教会前の広場か、町の市場(Marktplatz)などがその舞台となった。そうした広場や市場の周囲の家が栈敷となり、その家のバルコンは天国を表し、そういう家の脇の方には Herode, Pilatus 等の家が設けられた。これらの劇では、登場人物が 300 人にもなることがあり、またその演劇が一日中続くこともあった。14世紀以前に Trier でおこなわれた復活劇は宗教劇の原型を示すものであるといわれる。

この劇のキリストの墓の場面では、その墓のそばに来る女たちや天使はラテン語とドイツ語のふたつの言葉を使用した。即ちある天使がラテン語で歌うと、他の天使がドイツ語(Niederdeutsch)で歌い返しなどして、次の場面までそれが続くのであった。その他各地で受難劇(Passionsspiel)が行われたが、最も有名なのは17世紀に始まった Oberammergau のそれである。それは10年毎に行なわれ、村の大人 1,000 人と子供 250 人によって演ぜられる。現在の劇場は 5,000 以上の座席をもっている。

一方この宗教劇に対する大衆的世話物劇として民間に伝承され

たものに、謝肉祭劇(Fastnachtspiel)がある。そのもとはゲルマン民族時代の異教的な年中行事や祝祭の舞踊とか演技であって、中世のキリスト教の祭りの儀式や風習などと混合して原始的な民衆劇を作っていたものが、イタリーの謝肉祭の行事に影響されてオーストリアの南部やチロル(Tirol)地方からスイスやバイエルンにかけて次第に広まり、15世紀の中頃から、ことに南ドイツのNürnbergの商工組合の手によって盛んになった。Nürnbergの謝肉祭劇ははじめ、武技、舞踊のような余興的なものから、次第に簡単な対話ものや裁判劇のようなものとなり、さらに人情的な芝居や伝説物語、童話、宗教劇などから取材した茶番狂言式なものとなり、次第に近代的な喜劇に近づこうとしていた。

その表現は巧妙軽快である反面、内容は卑俗、猥雑で大衆の率直、素朴な祝祭的な雰囲気を反映していた。その他の都市の謝肉祭劇も、その内容は民衆の興味を引くような聖者、英雄、民間伝説、時事問題または風俗習慣を戯画化したもので、その表現は軽妙である一面、愚劣で滑稽であり、あるいはまた淫靡で皮肉であった。

このようなある意味で低い謝肉祭劇がNürnberg出身の工匠歌人(Meistersinger)であるHans Sachs(1494-1576)によって向上発展したのであった。

Hans Sachsは1494年11月5日に仕立匠のJörg Sachsの子(一人っ子)として生まれ、7歳の時ラテン語学校に入学しギリシャ、ラテン語を習い、声楽法、作詩術などの練習をし、将来詩作をする基礎を養った。ことに同校の教師で工匠歌人であったJohann Friedelから唱歌及び作詩術を学んだ。15歳で学校を終え、当時の風習に従ってある靴工匠のもとに弟子入りし、見習い期間2カ年を終えて1511年遊歴の旅に登り、Regensburgで修行をただけでなく工匠歌人の団体に加入した。次いでWelsに移り、始めて詩作をしようという志を立てた。そしてそれを生涯の天職とし、その創作の基調を国民の教養の啓蒙と道徳の高揚に置いたのであった。これがSachsの文学の最も重要な目標であった。やがて彼はHalle, Salzburg, München, Frankfurt am Main, Kölnなどを回って前後5カ年の旅を経て1516年に帰郷した。その後2年して結婚、優れた技量によって家業を盛んにするとともに工匠歌

(Meistergesang)の制作を続けた。

1520 年 Sachs はルターの教説を知ったが、23 年になってヴィッテンベルクの鶯(Die Wittenbergische Nachtigall)という金言詩(Spruchgedichte)を作ってルターを讃美するとともに自己の新教精神を宣明した。そしてこれを契機に工匠歌、笑話詩(Schwank)その他の文学形式を利用して新教の養護に当たることとし、27 年にさらに一步を進めてローマ法王を攻撃したが、このことで彼は市会から譴責された。しかししばらくは創作をやめていたが、創作の欲求を抑えることはできず、28 年に自作の詩 135 編を収めた工匠歌集の第 2 巻を出版した。そののち Nürnberg 市民の退廃した生活ぶりを見てこれを教化しようと Nürnberg 讃歌を上梓し、その後矢継ぎ早に教訓歌数編を作った。しかし彼の創作欲はこれだけで満足できず演劇の分野に手を着け、それ以後、喜劇や謝肉祭劇を作り、彼が死んだときには全詩作作品は 600 以上にのぼり、工匠歌は 4,275、笑話詩は 1,700、ドラマは 208、そのうち謝肉祭劇が 85 あった。

(2)1966-4-26

ハンスザックスの謝肉祭劇の創作は 1517 年に始まる。晩年の 1560 年 66 歳の年にまで至っている。その多くは即興的な 200 行～400 行ばかりの一幕ものである。その価値は作品を遡って眺めてみると玉石混淆の感じがあるが、その 85 作品の内 66 はザックスの円熟期(1550-1560)迄の作品であるだけに、作劇と演出の点で優れ、今日でも文学的生命を失わないもののがかなりある。今日の演劇理論や実際から見れば幼稚と思われるものもあるが、時代の演劇全般の発展段階を見て、素材に含まれる、又は作者が作り出したモチーフなどを考慮する必要がある。ザックスの謝肉祭劇の第一作は 1517 年 2 月に書かれた"Das hofgesindt Veneris" であるが、この作品はいわゆる Nürnberg の謝肉祭劇の伝統を継ぎながらも、作者の独自性を示し、かつまた今までは面白おかしい茶番狂言式のものにすぎなかった謝肉祭劇に、根本思想が与えられている所に特色があり謝肉祭劇の歴史の上で画期的である。ザックスはこの作品によって愛欲の力にはどんな偉い人もどんな才能のある者も、いかなる情熱も道徳も抵抗することができないことを警告し、市民道徳の向上をはかろうと意図したのであった。即ちザックスは人情の機微をとらえて事件の中から教訓を引き出して警告を発し、

市民を教化しようとはかったのであって、このことはハンスザックスの謝肉祭劇の特質である。

ザックスはその翌年の春(1518年)"Von Eygenschaft der Liebe"を書いた。これは前の作品で示された問題を一步進め恋愛の利害得失を述べたもので、ザックスはこれによって仮初めの恋を極力避け、恋愛は必ず結婚に至るべきだという持論を展開している。即ち前の作品で言い足りなかったことを明らかにし、かつ解決策を示している。またこの劇は謝肉祭劇がどこで演じられ、またいかに演じられたかを見るに都合のいいドラマである。即ち舞台は料亭か酒場であって、演技は客が飲食をしている前で行われたことが、この劇の中で小僧が客席から杯を取ってくることで明らかである。道具立ても腰掛けが用いられるくらいで、至って簡単であり今日のカフェやバーで行われる演芸のようなものだったのであろう。またこの中の老人の役はザックス自身が演じたものと思われる。この作品のできた翌年から1522年まではザックスの創作活動が止まっていた時期であり、謝肉祭劇も同じく生まれなかったが、1530年道徳的笑話詩の傑作が生まれた年に謝肉祭劇も出来上がり、さらに31年に一編を加えたが、そののち経験により技巧もさえ新奇な趣向も生まれている内に、構想においても脚色においても見るべきものが出来上がり、謝肉祭劇は彼によって次第に新方面を開いていった。もちろん彼は伝統を継いだのであるから、農民の生活を戯画化することでおかしみを表すこともあったが、彼はそれに留まらず町人もその対象とした。1536年に出来た"Ein Fastnachtspiel mit dreyen Personen, das Narren-Schreiben"もその一つである。これは医者が出男を連れて登場し、太鼓腹を抱えた病人の腹を切開して、高慢、吝嗇、嫉み、不潔を表すバカを取り出し、最後にそうしたバカを生み出すバカのもとを取り出すことを描いた劇で、その内容は道義の教えであるが、それを滑稽な所作で表現している。ここに徳の教えと諧謔文学との結合が見られる。それ故この作品はザックスの作品の特徴をよく表すとともに、当時の文化の状態から見て謝肉祭劇の達した最高の段階にある作品である。ザックスの謝肉祭劇の創作は1550-1554年までの間に最高潮に達した。即ち1550年の1年間の作品数は8篇、51年は11篇、52年は6篇、53年は15篇、54年には10篇となり、そののちは悲劇や喜劇に主力が注がれた。1550年から54

年の間はザックスの56歳から60歳までの時代であって、老いて益々盛んな創作意欲が中断される。そして50年以後は"Decamerone"やJohannes Pauliの"Schimpf und Ernst"（冗談と真面目）などの読書から取材し、それに創意を加えて内容を豊かにするのみならず、原作を緊縮して舞台効果を上げている。もちろん多数ある作品の中には伝統的な顔見せ形式によって喧嘩口論や悪妻物語を取り扱い、また叙事詩を対話形式に移したにすぎないものもあるが、素材の中に潜む喜劇性をとらえて人物に新しい命を与えたものも少なくない。1550年の作品である"Der farent Schöler nach Paradeiß"はその一例であって、素朴なユーモアの漂っている作品である。この一幕ものの対話の中に愚かな百姓女の愚かしい純情が映し出されているとともに、欲を張って追っかけたために一層損をする夫が対照的に描かれている。

(3)1966-5-17

ハンスザックスの劇作はSachs 61歳の年、即ち1555年を境として舞台戻りへと転換している。その後の謝肉祭劇は安易に書き流されたものが多いだけでなく、喜劇の領域に著しく接近している。このことは謝肉祭劇が中世から近世へかけての過渡期の産物であって、文学のジャンルとして存在することは時代の志向にも作者の芸術的欲求にも合致しなくなったことを物語っている。もともとザックスの謝肉祭劇は簡単な対話論争の形式から発して、悪妻、農民、僧侶などを揶揄する物語的風刺劇となり、さらに啓蒙的教訓劇、また人文主義的な思想劇となり、結局人情喜劇、環境喜劇、性格喜劇に高まったが、もともと大きな矛盾を含んでいた。それはザックスが従来の低級な芝居を向上させ、人倫の道を教え市民道徳を高めようと心がけていたからである。これは人文主義の精神の特質であって、16世紀のドイツ劇の芸術性を失わせた理由だが、ザックスの謝肉祭劇も諧謔と教訓とを芸術的に融合させることができず、諧謔の点で成功すれば純喜劇となり、教訓を強調すると叙事的対話となった。だからこの後の彼の謝肉祭劇は笑話詩劇(Schwänke)か説話詩劇(Spruchgedichte)に似たものが多く、その間少数のものが優れた性格喜劇とも言うべきものになっている。そこで1555年から60年までの間に作られた19編の謝肉祭劇は、教訓的なもの、笑話的要素に富むもの、喜劇に近いものの3種類に大別することができる。

教訓的なものとしては

1. Ein Spiel mit fünf Personen: Der Tod im Stock(1555)と
2. Ein Spiel mit dreyen Personen: Zweyer Philosophen Disputation von dem Ehstande, ob besser sey ledig zu bleiben oder zu heyraten ainem weisen Mann をあげることができる。

『木株のなかの死神』は 1547 年 1 月 29 日に作られた工匠歌 (Meistergesang)ですすでに取り扱われ、素材となっている物語は Friedrich Rückert の"Eine persische Erzählung" と同一のものである。この劇では最初に天使が登場して序辞を述べ簡単に内容を紹介し、食欲はあらゆる害悪のもとだといい、さらに結辞にも天使が現れて同様のことを繰り返して戒める。このように序辞や結辞の両方に天使が出てくことは従来見られなかったことだが、舞台劇の作法の影響が現れたものと思われる。この劇は天使が登場した後、森の隠者が 3 人の強盗に殺され、Jeemas が酒を買いにやらされて、それに毒を入れて帰り、2 人の仲間に殺され、その酒を飲んだ 2 人も中に入っていた毒のために死んでしまう。再び天使が現れて結辞を述べるが、隠者が木株の中の金に心を引かれながらも逃げ出すところは自然であり、3 人の強盗の行動もその性格から必然的に導き出され、この作品を価値あるものとしている。しかしこの劇には祝祭的気分は見られず、人間の欲を戒める考えが強調されている。

次の作『2 人の哲学者の討論』も戯曲の形式の教訓的な対話となっている。即ち主人公 Thales が訪ねてきた Solon と結婚と独身の優劣論を戦わせ、ターレスが奇計によってソロンの息子が死んだという嘘の知らせでソロンを悲しませたが、ソロンが余りにも悲しむので今までの話が嘘であることを打ち明ける。さらに独身の利益のあることを説明するが、ソロンが承服しないので明日また賢人たちを招き検討しようということで退場し、討論の結論は示されない。しかし結婚生活にも独身生活にもそれぞれ利害得失があるから正しい結婚生活を送るべきだと説こうとしたのであろう。この作品は劇的動作に乏しいにかかわらず、偽の巡礼を登場させ対話だけで興味をつないでいるのは優れた腕前である。

このような教訓的なものに対して、笑話的要素に富んでいるも

のには、一幕の茶番狂言として今日も生命を保っている傑作がある。その内の主なものは **Eulenspiegel** の笑話を劇化した2編である。即ち

1. Ein Fastnachtspiel mit vier Personen: **Eulenspiegel** mit dem Pelzwischen zu Nügstetten(1556)および
2. Ein Fastnachtspiel mit dem braven Hostuch und dem Bayern(1557)

前者はオイレンシュピーゲルが毛皮を洗濯してやると言って、宿屋の女将始め近所の女房たちからたくさんの毛皮を集め、釜の中で牛乳と一緒に煮て、森へ洗濯棒にする菩提樹の枝を取りにやらせたあとで、毛皮をすっかりぼろぼろにして逃げていったことを劇化したもので、謝肉祭の気分を覆い尽くした芝居である。片目のお喋りで好奇心の強い宿屋の女将が、**Eulenspiegel** と皮肉な滑稽な問答を取り交わすところは、作者のもっとも得意とするところであり、女房たちが毛皮のクリーニング法を信用して **Eulenspiegel** の言うとおりに動き、ついにへそくりの金で若返り法を施してもらおうというに至っては、愚かで滑稽な百姓女を代表する喜劇的人物になっている。そしてこのように喜びの後だまされたことを知った有様を描いて対立の効果を高め、喧嘩の場面を持ち出して幕を閉じている。この劇では登場人物がたびたび舞台を去るが、その間の空白を埋めるために独白や対話が巧みに挿入され、次の場面に期待を抱かせるようになっている。

(4)1966-5-24

後者も巧みな潤色を施した傑作狂言である。これは **Eulenspiegel** が **Neltzen** の年の市で乞食僧や与太者を仲間に引き入れ、女房が隠していた金を見つけだし、その金で市場でズボンの生地を買った百姓をだまし、それを巻き上げる話を劇化したものである。登場人物が紹介される第一段、**Eulenspiegel** が悪巧みを考える第二段、それが実行される第三段が巧みに結合され、舞台に隙ができないばかりでなく、**Eulenspiegel** が与太者に話す前に乞食僧と話し合いができており、人物の行動にもモチーフが与えられているのは、作者が優れた劇作家であることを示している。このふたつの作品はいずれも **Eulenspiegel** の物語の **Volksbuch** に拠ったものだが、物語の筋はかなり忠実に追われ、劇を構成するため多くの粉飾がなされ、ザックスの謝肉祭劇としてはほぼ最高のものとなっている。

そして喜劇に近い謝肉祭劇としては、ザックスの44年に渡る(1517-1560)謝肉祭劇の創作の内、最後の3つの作品である。

即ち

Ein Fastnachtspiel mit fünf Personen: Der verspielt Reiter.

Ein Comedi mit sieben Personen: Die jüng Witfrau Francisca, und hat drey Actus.

Ein Comedi mit acht Personen: Esopus, der Fabeldichter, und hat fünf Actus.

第一作「賭博に負けた馬丁」は、貴公子 **Engelhant** が結婚するためイタリアへ向かう途中、雇った馬丁の **Klas Schellentaus** が賭博好きのごろつきで、**Engelhant** の昼寝の間、賭博場へ出かけてすっかり負け、裸にされ戻ってくると **Engelhant** の金を盗み、主人に借金を申し込む。**Engelhant** が怒って馬に乗って出ていけば後を追かけ、向こうから来た二人の百姓に頼みこんで **Engelhant** を捕まえ裸にしてしまうことを表したもので、**Engelhant** が結辞で、自分に人を見る目がなくこんな目にあった、無頼の生活を送ってきた者の言うことをたやすく信じてはならない、というドラマである。この作品はかつてデカメロンの第8話に取材し笑話詩としたものをさらに劇化したもので、一種の性格喜劇である。**Klas** は性格的に不徳遺憾であって、その行動は性格から発したもので、このような悪人にかかっては善人である **Engelhant** は太刀打ちができない。**Klas** が厚かましく出れば **Engelhant** は結局それに負けてしまう。こういう不合理な人生の一面を風刺しているのがこのドラマの意義であり、愚かな百姓たちによって主人が裸にされ、召使いが主人の立派な着物を着て威張る所に滑稽さがある。だからこの劇は笑いの中に風刺を含んだ性格喜劇とすることができる。

この傾向は次の作品 "**Francisca**" でさらに進行する。この作品もデカメロンの第81話に取材し、喜劇と銘打って3幕に分かれ、3人の主要人物の性格が巧みに書き分けられる一種グロテスクなユーモアとスリルが現れている点で、環境喜劇と見なせる。この作品は若くて夫を失った **Francisca** が二人の青年に求婚され困った末、一計を案じ、一人の男である **Alexander** の所へ女中をやって、その日墓地に葬られた **Stanadio** という男の墓穴へ入り、死人の着物を着てそのそばに寝ていること、そうすれば下男が行き担いで自分

の家へ連れてくることを告げさせる。また一人の男 **Rinuczo** には、自分を愛しているなら今夜墓へ行って死んだ **Stanadio** を担ぎ自分の家へ来てくれと伝えさせる。二人の男は恐ろしく嫌だと思ったが、結局言われたことを実行し、**Rinuczo** が **Alexander** を墓穴から担ぎ出し、ある家の前まで来ると、夜警に出会い死体を投げ出して逃げ出す。夜警がそれを追っかけ退場すると、投げ出された **Alexander** もまた起き上がって逃げ出し、しばらくして **Rinuczo** が再び登場し死体を探すが見あたらず、巡査に見つかったのだと考え家へ逃げ帰る。こののち口上役が登場し婦人には貞節を勧め、若者には恋に迷うなど教える筋のドラマである。この作品でも趣向を変えたり、あるいは自作の挿話を挟んで奇計が起こすグロテスクな滑稽味を高めている。ことに初めの舞台で **Francisca** が喪服で登場し、結婚後、夫に死なれて二人の青年が言い寄り、断ってもなかなか諦めない。そこで一晩考えた末、よい計略ができた。これなら必ずこの勝負に勝つだろうと言っているのは、主要人物3人の関係が明白に知られ、それが **Francisca** の計略でいかに展開するかを期待させる点でこの作品を優れたものにしている。

最後の作品「童話作者イソップ」は5幕の劇で、形式も内容も他の喜劇と全く同種のものになっている。これは **Steinhöwel** の "**Aesop**" に収められた **Das Leben des hoch berühmten Fabeldichters Esopi uß krichischer Zungen** によって1555年6月に出来上がった工匠歌の **Esopus mit sein Herrn Xanto** を劇化したものである。そしてイソップが主人に買われて奉公を始めたが、主婦に嫌われたもののかえって主婦が家を出るように仕向け、最後は計略によって主婦が家に帰って夫と仲直りする次第を描いたもので、結辞で口上役は貞淑な婦人方にお願いしますが、この狂言を見て気を悪くなさぬよう、これは1,000年も前の話でこんな悪妻はもういますまい。しかしその娘や孫が残っていれば、男としては、もう少し大人しくなって頂き家庭の平和が増しますよう **Hans Sachs** は願いますと言う。これは観客を笑わせると同時に教訓を垂れていて、大変諧謔的な効果がある。こうして謝肉祭劇特有の悪妻物語が上品な教訓劇となっている。

Hans Sachs の謝肉祭劇はこのイソップ物語で最終段階に達した。詩人はその知識と真面目な人生観照によって謝肉祭劇の範囲を拡大し、内容を充実させたが、これ以上になると謝肉祭劇本来の使命をはずれるものになっただろう。謝肉祭劇は庶民階級の祝祭的

余興だから何時どこでも即座に演じられるものでなければならぬ。従って日本の狂言のように出来るだけ登場人物を少なくし、筋を簡明にし舞台装置を簡単にしなければならぬ。この意味で Hans Sachs の劇には周到な用意がなされる。このことは Hans Sachs 自身が俳優であり舞台監督であった経験に負うところが多い。内容においても新生活に直接訴えるようなユーモアが基調をなしていなければならぬから、奇抜な趣向と軽妙な会話を必要とする。Hans Sachs はこの点でも当時における最も優れた劇作家であった。彼は原作をまず工匠歌や笑話詩または説話詩(Spruchgesang)で取り扱い題材を十分に消化した後、あるいは改作し、あるいは翻案して人物の性格を作り上げた。原作の人物や事件を選択する方法は、Hans Sachs の劇作家としての手腕を十分に窺わせる。その用語も博覧強記と修練によって自由自在に駆使されており、対話は農民や市民の生活と人情を写實的に写し出している。滑稽や諧謔は当時の大衆を目当てにしたため粗野で卑俗なものも見られるが、同時代の他の作家と比較すると、大変な違いがあり作品の品位の向上に力を注いでいる。しかしハンス・ザックスの劇の特色は、ザックスが国民大衆の教化を念願し、諧謔文学を通じて市民社会の生活の指導原理と人倫の基準を説こうとしたことにある。結局作者の性向と時代の要求によって、ザックスの謝肉祭劇は次第に教訓的な喜劇へと変わっていった。